

小田原史談

第119号
発行所 小田原史談会
小田原市南町2-3-21

北村透谷家譜の研究 (4)

中野 敬次郎

代玄快

透谷研究家で透谷全集も出して知られた故勝本清一郎氏が記したところによると(透谷全集)、神奈川県足柄上郡竹松村(今は南足柄市)の医師大内家の出身でなかなかの秀才であったので懇望されて夫婦養子で北村家に入ったのであると北村家の言い伝えや、古老談話などから述べているがこれについては単なる言い伝えで実証になる記録が一つもないので大いに異論のあるところで、或は丸山家の出身ではないかとも考えられるふしがあるが、これは確認も今後にもまつことにしたい。

いづれにしても五代玄快は二代玄快の実子でなく養子であることは間違いなさそうであり、大内家も北村家と同様に周防大内氏の末裔の家柄であるから両家の間には何等かの深い交渉があったものと思われる。さて、五代玄快の時になると北村家は前川村の在家医師ではなく小田原藩御召抱えの医師となつて出現する。北村家がいつ小田原藩召抱えの藩医になったのかは年月日が明かでないが小田原市立図書館の所蔵する本で藩士の履歴綴である「一代記」というものの中に北村見順が見えて「父の見順が死亡してその子玄快が天保十年に跡目をついだ」ことを記しているから、四代見順のときすでに藩医になつていたのでないかと思われるが、この四代見順という人は病弱で、天保九年(二七)十月二十一日に世を去ってしまったので、翌天保十年から五代玄快が北

村家をつぎ本格的に藩医としても活動するようになったのである。

五代玄快が藩医として召し出されるにいたつた事情について、前川の町屋の古老達は、「頸をなでるだけで病の治る医学だったとか小田原の殿様が急に横腹が痛くなつてどの医者も治せないで玄快が呼び出されて直したので、家も小田原の城下に呼び移されたのだと言っている(内田勝彦氏筆北村透谷の祖先)」玄快は名医であつたので特に見出されたのだと思いが、もし竹松村(南足柄市)の大内家から入婿したと伝えられるのが彼であるとすれば、大内家は在家医師でありながら家柄もよく、小田原城中に召されて出入しつたのではないかと思われる。何れにしても玄快は若い頃から秀才で知られ医学にもすぐれており、その上に儒学の方にも一見識のあつた人物であつたらしい。

小田原藩家中の分限帳を見ると、寛政、文化、文政の頃のものは北村家の名がまだあらわれていない。私の手持のものには天保十年(二八)の分限帳に初めて、御扶持米十人分(著者註、二十五石ぐらい)

北村玄快

北村玄快として召し出される名前があらわれる。天保十年(二八)は先代見順(天保九年歿)の死亡した翌年で玄快が家督をついで間もなくであるから、この年か、その前年ぐらいに藩医に召し出されたのである。

北村家の墓地の中に、北村家の祖先を一括総記した供養塔のあることは前章に明記しておいたが、これを見ると建設者ははつきり、○小田原家中北村玄快建之と彫つてある。ただ何故か建立の年月日が記してない。しかしその中に北村源兵衛の娘の「智彭童女」の院号を記しているから、同娘は天保八年五月五日に歿しているから、この墓碑の建立はこの年以後のものであることが明かであり、恐らく彼が小田原家中に取り立てられた誇りと喜びを以て一族祖先の供養をしたものに違いないと考えられるので、天保九年か天保十年の建立であろうから、先掲の

分限帳への初出とも併せ考えて、天保十年かその前年に家中取立を受けたものと考えられる。

天保十年とすれば玄快二十四歳の時である。玄快は間もなく石高三十二石となり、更に弘化三年に、そして嘉永二年とに五石づつ増加されて四十二石一斗四升(一代記)に至つた。そして明治維新の廃藩のときも同石高であった。藩医としては中流であつた。

さて、玄快は小田原家中に取り立てられて藩医となつたので、藩から屋敷をもつた小田原城下に移つたのである。当時の小田原城下の唐人町、後の万年四丁目五五六番地、今の浜町三丁目十一番一号の地である。そこで北村家は二家に分れることになつた。医家玄快は分家となり、本家は前川の町屋で純農となり、二代玄快の末娘すみ、五代玄快からすれば養妹にあたるのが、前川村岩越平八の五男源兵衛を婿に迎えて農家北村家をたてて今日に至つて来ている。

透谷祖父の五代玄快は妻ちかとの間に快藏(透谷の父)と、さくの一男二女をあげているが、後になつて後妻みちを迎えている。先妻のちかは玄快が養子にはいるときにつれてきた夫婦養子の女房であるというが、そして三人の子まで生んでいるのに、出身、生年、歿年も明かでない墓石もない。

「北村家戸籍簿」(小田原市除籍簿)にも載つておらず、「長泉寺過去帳」にもなく、医師北村家の維新以後の菩提寺である小田原谷津の「高長寺の過去帳」にも記してなく、同寺の北村家墓地にも墓石もない。長男快藏の「自筆履歴書」にもないし、彼はまたこの実母のことは語らなかつた。孫の透谷の作品にも日記にも手紙にも祖母のことはしばしば記録にあらわれるが、それはみな継祖母みちの話であつて、実祖母のこととは一言も触れたものがない。

北村家では玄快の先妻のことは一切語らぬのであつて、すべて抹殺している。これは何んのためであろうか。

玄快が再婚したのは慶応二年(二七)で、五十三歳のときであつたが、先妻ちかは死亡したのでなく離縁し

(注)透谷一家は五代玄快の先妻を語らず

た。小雨降る日であったが
雨具もなくあちらこちら物
色した、漸く三宿の八百源
(旅館兼料理屋)に宿るこ
とになった。夜は歌や三味
線で賑か、宿屋の主人の好
意で奥座敷の閑静な室を与
えられたが、でもやかまし
い、私は十九才だが、生れ
て始めて東京、外泊、運動
もさること乍ら何事も勝手
わからず、朝から晩まで勉
強、錢湯は近所にある
が、これもいった事なし、
何んとなく恐しかった。隣
りに中年の夫婦が居って、
何かと教えて呉れた、浴場
へも連れて行って呉れた、
それも四日後のこと、湯
舟の大きなのは驚いた。
然し毎日勉強、愈々
試験日、三年編入の試験、
国語、漢文、地理、歴史、
英語は及第点だった、幾何
には弱った、育英では三年
になって履修するので二年
にはない、全くの白紙で出
した、発表の日となつて恐
る／＼見にいった、私の名
は無い、不合格だ、事務で
聞いたら、二年ならば編入
許可する由、兄に相談した
一年損だが仕様が無い、許
を得た。十九歳の私は東京

都世田ヶ谷区三宿曹洞宗第
一中学林二年生に四月八日
からなつた、私は寄宿舎に
入った。
学校はコの字型に校舎が

配置し、正面右側に寄宿舎
収容能力八十人位、左側に
教室、事務室、中央に講堂
兼法堂(仏事法要をする
処)その裏に林長室、職員
室、行者室、講堂の前が運
動場である。

寄宿生活は規律正しく、
面白い事愉快の事もあつた
門限は九時、外出には学生
服か和服ならば袴着用、下
級生は上級生に対して脱帽
敬礼をする、日曜祭日以外
は朝課と云うて朝のお勤、
法衣をまとい、お袈裟をつ
けすべて如法(定められた
規則)に実施した。
朝課が終わると法衣にて朝
食となる、朝食後各自の室
及廊下の清掃をする、私は
本棚の上段に亡父の位牌を
祀り毎朝線香と浄水を供養
する、授業まで自習なり雑
談をして楽しく過す、室は
八丈、上下各二間の押入、
上段は寝具、衣類、下段は
洗面道具、履物、木炭等を
入れる、室は二人乃至三人
で頗る家庭的で誠に和かで
ある、私は二年の時はず
二宮町龍沢寺徒弟竹内長春
(水尾長春)君と同室、彼
は勉強家で殊に英語がよか
つた。

寄宿生活は面白い事、罪
ないたづら等思出はなかな
かある、大正十一年頃青森
県や秋田県の山奥の寺院か
ら来た生徒は電気を知らな

い、腕白ないたづらの上級
生が新入生徒を呼ぶ、呼ば
れた下級生(新入生)は袴
をつけて呼ばれた上級生の
室に行く、室に入るには障
子だからノックでなく「〇
〇が参りました入ってよろ
しう御座いますか」と云う
上級生が「はいれ」と云う
下級生はチャントお膝して
かしこまる、上級生は電球
を振って無理に線を切つて
「寮監へ行って電球の線が
切れました線を入れて下さ
い」と云え、寮監は必ず入
入れて呉れる、下級生はい
っ参りますと云つて切れた
電球を持って寮監に行く

下級生は型の如く袴をつ
け寮監に行つて「電球の線
が切れました線を入れ替え
て下さい」といふ、寮監が
「誰がそんな事を云うた、
電球の線は入れ替えること
は出来ない誰が云うた」新
入生が「何号室の〇〇が云
いました」、寮監が「〇〇
すぐ来るやうに」
新入生はこの旨を伝える
上級生は寮監さんに行く、
ものすごい教訓を受け、青
くなつて自室に帰つての一
幕、罪のないいたづら
第一学期の試験は、七月
上旬に行はれ七月の盆に暑
中休暇となつてそれ／＼回
へ帰るに間に合う様になる
のが通例のやうだ、只でさ
え暑い真夏、特に試験だか

ら、たまつたものでない。
袈裟は足の踏む所、た
たみの上とか布団の上に置い
てはならない、袈裟をかけ
る時は頭に頂いて合掌し
て偈を唱えてかけよと厳し
く教えられている。その黒
のお袈裟を入口の所につけ
それに白く切り抜いた「う
どん、そば」と太い字を糊
ではつた、これが巡廻の寮
監さんにもつけられ大目玉
茶目も茶目大茶目。

中学林の寮では、新入寮
生に対し歓迎会を催すこと
になつて居る、私が三年生
の時(勸進帳)安宅新開の
場を模して三宿の関と題し
富山県出身の黒崎源道を関
守とし私がその臣にしたて
て、関守は法衣に色々工夫
して衣裳を造り、私はかみ
しもを紙で間に合せ、詞は
台本の作製、頗る本格的、
稽古に四五日かかったが好
評だった、私が総指揮と云
うか、監督と云うか、演出
と云うか、兎にも角にもそ
んなもの、その写真を今持
つて居る、懐かしいものだ。
私は芝居が大好きで帝國
劇場、歌舞伎座、新富座、
明治座、浅草の宮戸座等々
よく観劇に行った。勉強も
人には負けないが声色(声
帯模写)に興味を持ち三宿
の練兵場には行って大きな
声で習つたものだ。
仮名手本忠臣蔵七段目お

かかる寺岡兵右エ門の出合、
おかるは先代の梅幸、兵右
エ門は先代の吉エ門、楼門
五三の桐では石川五右エ門
の松本幸四郎、羽柴久吉は
先代の宗十郎、辰橋では鬼
女を先代の秀調、渡辺綱を
先代の左団次、世話情浮名
横櫛源治店の場ではお富を
先代の秀調、与三郎を先代
の羽左エ門、丑松を松助、
天衣粉上野初花松江玄関の
場では北村大膳を羽左エ門
河内山宗俊は吉右エ門と云
う具合に随分勉強したもの
だ、その成果で歓迎会は大
成功であつたらう、四五年
生の中に芝居の好きな、声
色の上手なのがいて芝居見
物に連れられていったり声
色を教えられたりした、
この様な友達は、決してよ
い友達とはいわれない、私
はこれ等友人の感化を受け
たことは事実だ、だから孫
達に友人を選ぶは自己の將
来を左右すると強調して教
誨して居る。

寄宿舎には炊事を担当す
る賭の夫婦がいて一定の金
額によつて調理して呉れる
それに炊事委員と賭とが相
談して献立を決定するけれ
ど賭は成るだけ利益が多い
方がよい理、委員は高級な
献立でおいしく一般生徒に
食べさせる義務がある、だ
から委員と賭とは対立して
両者は仇敵の関係である。

おいしくない料理ばかり
作ると委員の怒を受け委員
の命令で賭征伐となる。
食事は一テーブル六人で
中央におひつがある賭征伐
には五目飯とか桜飯とかの
時である、生徒は出来るだ
け御飯を食べる、見る見る
内におひつは空になる、あ
ちらでも御飯、こちらでも
御飯、賭はおひつに御飯を
入れては配付する、忽に元
がなくなる、委員が交渉し
て賭に炊かせる、副食も造
らせる、一時間はかかる、
生徒は運動場であられる腹
をへらす為に、賭さんとは
んだ災難、準備が出来ると
ヒョウシギ(戒尺)が鳴る
それとばかりに全員食堂に
出る、若い青年だから食べ
るわ、食べるわ、又元がな
くなる、又炊かせる、三回
目位になると賭さん泣きべ
そ、無理もない副食も造る
のだから、随分罪なことを
したものだ、委員は四五年
のボス、賭さんは可愛そう
僅の利益で生活して居るの
だから、賭さんには感謝こ
そすれ賭征伐など言語道断
三年第三学期にストライ
キをした、或る先生に対す
る不信感の結果であつた、
不信感と云うよりも忠実な
よい先生であつた、予習復
習は厳格に強制する、出来
ない生徒にドンドン当る、
或る先生と云うて名を挙げ

或る先生と云うて名を挙げ

私は鶴巻(旧落幡)極楽寺から万歳の声に送られて出た、新宿から中央線にて甲府駅下車、指定の旅館に到着、翌十日早朝聯隊から迎

軍隊手帳に、戦時着裝被服大小区分に
帽 六号
衣袴 五号
外套 五号
靴 十文七分

等細かく記してある
私は第六班、班長は板山軍曹、注意事項やら大小便の仕方、ノックの仕方を教

ある、愈々中食、歓迎会である、鯛、羊かん、きんとん等見た目は誠に美味らしいが、食べたらずかかった甘味もなく、塩分もなく、私は昨日中食に汽車弁三個も食べた、入隊すると、食事は御粗末だと聞かされた無理して食べたから今もって満腹、精神的にも意気消沈、何を食べてもおもしろい、二二年兵はおもしろい、と云って食べていた午後一時迄休憩一時から班の名称、聯隊の建物の名称等教わった。

今迄は学生々活、智的生活、古の聖賢、禅僧の跡足を学んで、己が見聞を広め

て来たが今日からは天地の相異、見るもの聞くもの殺風景、一日の生活状況を簡単に書いてみよう。

起床ラッパは夏冬で異なる就寝時間は八時間に定められて居る、禅生活は鐘、太鼓によって起居動作するが軍隊はラッパによって動作する、起床、就寝、食事、命令受領、点呼等々だからラッパの音を覚えねばならない。

起床ラッパで一斉に起床早いもよくない遅いのも悪い、ラッパの声、間髪を入れず聯隊中上は聯隊長から下は一兵卒まで一斉、私等は衣袴(衣は上衣袴はズボン)をつける、自分の寝台の前に立つ班の最高の上等兵が点呼をとる、総員何名不在員何名、不在員は衛兵何名、使役何名、異状ありませんと報告を頭の中に入

れ週番士官に通報する、週番上等兵が飯上げに出ると大声で怒鳴る、我先きに飯上げに出る、炊事場から飯を運ぶ、週番上等兵が各班の人員に配して配分する、副食も分配、その間在班の兵が毛布をたたき、食器に飯、副食、湯を入れてそれ(の)の定位位置に配置する、食器其の他すべての物には各自の番号が盛られてある食事は早く食べると、二年兵はゆっくり食べると云うけ

れど、口と腹とは違う、昔の職人と同じだ、職人とゆうても小僧は熱い御飯は水を掛け湯のみ、煮豆あたりは立つ時に手の平にあけて歩き乍ら食べる始末、初年兵は全く之と同じ、熱いのが一番にが手、水をかけて食べたものだ食べ終ると食器を纏めて洗いに行く、週番上等兵が各班何名使役に

出ると云う、外の掃除だ、すべて之等が成績につながる、八時になると学課或は演習に整理、十一時頃午前中の演習は終る、床を袋状にとる、飯上げに行く、靴を磨く、銃の掃除、洗濯する。一時午後の演習、三時半頃帰班、銃其の他の兵器被服の手入、入浴、被服の小修理、六時夕食、初年兵時代に煙草五本飲む兵隊は上々、九時消灯、目も当てられぬ多忙、手紙を書く暇も仲々ない。

聯隊には酒保があつて酒あんばい、文具、軍手等を売って居るが二三ヶ月行く暇がない夢にだに見れない反面二年兵は楽なもの、総ての雑事は初年兵がやって呉れるから、
新しい襦袢(シャツ)袴下(股引)が配給になると襦袢は背中、袴下は膝を雑巾をさす様に縫う切れない為、之が大変、自分の

ものだから、馴れない手つきで針を持つのでから大変、努力、精進、銃隊の班長の官姓名、中隊大隊長聯隊長旅団長師団長の官姓名の暗記、其の他勅諭読法の暗記仲々大変だ。

私は勅諭の暗記は出来なかつた。
一期は三月末日終了、終了と同時に上等兵候補者の人選だに漏れると上等兵には成れない、幸私は人選に漏れなかつた。
これが大変、朝の点呼が終ると銃剣術、一般の者は飯上げ、掃除、床上げ使役等、酒保など行く暇はない。手紙を書く時間も仲々ない、演習で十時頃休憩でタバコを飲むのが何より

の楽。
甲府は夏は暑く冬は寒い入浴から班へ帰る三十米歩く手拭が凍る、山梨県出身の週番上等兵は「水道のできないから洗濯がでない」と云う、でるとできるが反対、神奈川の兵隊は大声で笑う。
そんな寒い朝銃剣術は仲々、けれど始めれば暖かになるから左程でもない。
時々練兵場で号令演習がある、候補者のみ大きな声して意気昇天の志。
一ヶ年に三回は富士裾野の滝ヶ原廠舎へ二十日位の予定で往復行軍で出掛ける

甲府聯隊は行軍は強いと云う評価だが、さもありなん行軍は月に二三回は実施中でも耐熱行軍耐寒行軍は容易でない。
大正十二年九月一日富士

吉田(一泊の予定で十一時整列した。処が関東の大地震、整頓棚の品物は落ちる時計は止る、炊事場の器具は破損、軍装の特務曹長(准尉)が宮庭の木にしがみつ、
「どうしよう、どうしよう」と大さわぎ、兵隊が地震が静かになつてから大笑の一幕もあつた、
炊事場が破損しても我我は弁当を已に所持して居るから、聯隊全員出発行軍、甲府には破損した家は余りなかつた、崩壊した建物は古いものが三四あるのみ、御坂峠を越え吉田へ着いた時は夕方、私は二ヶ年で宿泊した所は吉田、河口湖、精進湖、山中湖等々、中でも吉田は典待が悪かつた、考へると年に四五回兵隊が宿る、然も毎度の損害、飽きられるのも無理はない、罪は兵隊の方にある、井戸も注意して汲まない調度品を注意して取り扱はない。

それら度々、嫌らはれる。話は横道になつたが、吉田へ来た時は東京方面の空は真赤、目下東京は大火災だと云うニュースが吾々の耳に入った。滝ヶ原へは電

話は通じない、聯隊から伝令を出したらしい、伝令の通報に依れば廠舎は当分使用に堪えない由、故に聯隊全員明朝甲府へ帰るよう伝令さる。
神奈川県の被害甚大、東京方面の空は赤く、火の海被害莫大、汽車電信電話不通、鶴巻、小田原の案否知る由なし、心配、心痛。
翌日行軍で源聯に帰る、炊事場は応急修理して聯隊総員食事に支障なし、九月末日頃兄より葉書到来、私の一生の弔報、愕然。
一日地震で極楽寺の庫裡倒壊、慈母、兄の妻及び子供花子庄死の由、戒名は霜幹院禪樹果功大師
宮本 ミキ(母)
孝山院常恒妙艶大師
ツネ(姉)
華効童女

花子(姪)
兄一人になつたわけ、心痛いかばかり、兄は吉沢小学校に勤務中の由、三人共大きな梁の下になり見るも無惨な姿、早速手紙を班長板山軍曹に見せた処一日の練兵休、謹んで班に在って冥福を祈れとの事。
横浜東京方面に戒厳令がひかれた、三ヶ月も経過して罹災した家族のある兵隊及び罹災地方の在隊者二十名を編成して平塚秦野方面を慰問行軍し私も之に参加

することを得た指揮は板山軍曹、極楽寺へも一泊し香華灯燭を供へ母姉姪の冥福を祈った。大震災の状況概ね左の模様。

兄は吉沢小学校へ落幡（現在秦野市鶴巻）から六料の所に通勤、学校は倒壊しなかった、職員生徒全員無事。兄は極楽寺の庫裡倒壊し母、妻及び子供三人死の報を受くるや取る物も取り敢えず極楽寺へ向った、然し道路は亀裂、自転車には乗れず徒歩で三時頃到着近所も全部倒壊した。然し死亡者は我が家だけ、早速医師の診断書を得、死亡届を済ませ、倒れた古材にて龕箱二個造らえ一つは母、一つは妻と花子を奉祀して、天徳寺の三浦玄保師を請じ土葬にて葬儀を済せた由、聞いた私は只涙哭言葉は出なかつた、兄の身にとれば如何ばかり。

兄一人では吉沢へ通勤もならず亡妻の妹保子（後妻）さんに来て貰って炊事洗濯及び雑務を依頼した。私が小銃を持って慰問した時居られた当時数年十七才とか、翌日秦野にて本隊に合した。尚特別の配慮にて小田原の寿昌寺へも立寄った寿昌寺も倒壊しお匠様と姉直子さんは健在先づ安心した。御二人は本尊様の裏の位牌堂だけは残って居た

のでその所で生活して居られた、私の本籍文具類は未だにそのまゝ本尊様は祀つてあった。私は倒壊した材木の下にもぐり教科書を出してみたが雨露にて物の用に立たない。お匠様の祖録（正法眼蔵九十五巻、伝光録、永平広録、仏祖三経等）損傷し正面の右の上に並べて乾して居られたそれから見れば私のものなぞ問題外無事終了源隊に帰った。

上等兵候補訓練中私は風邪、発熱三十九度の状態、早速医務室にて診察、入院の衛戍病院に入院した、三十九度もあるのに寝るは寝るは、軍医の言に依れば初年兵の患者は総てこの様だとの事如何に睡眠不足であるかを物語っている。快方に向うと、お湯、お粥御飯と流動物から御飯物になる、約十数日入院したと記憶して居た、入院は天上界、別世界。

大正十三年二月廿九日勤務勅励により褒賞され、同年五月十三日褒賞休暇附与さる、同年十一月三十日善行証書附与された、如何に軍務に忠実精神したか。大正十二年十一月三十日二年兵除隊、翌十二月一日一等兵同日上等兵と命命された。候補者中上等になれなかつた兵は少くなかつた。

軍隊生活は良い所は沢山ある、今思うと悪い所もある、本当は一年で除隊して之を社会に生かし、自学督促すれば満点、処が二年兵になると精神的、勤勞的によいばかりとはいわれぬ私はこの轍を踏まぬ様自省するつもり。

大正十三年一月十日初年兵が入隊した、古兵が除隊してから四十日間洗濯被服の修理靴の手入等自分の事だけ染な軍隊生活、私は平出上等兵と共に初年兵係を任命された、教育に演習に内務につき総て情を同うすることに努めた、同情の一句に尽きた。例えば初年兵に第一回の外出許可が出た、勿論引率外出、私の主張で甘党と辛党の二班に分け私が辛党引率、甘党は映画館へ行つたとか、私は料理屋へ連れていった今日夕方迄は兵隊でない野人となつて無礼講、飲め歌え、然し料理屋を出たら軍人になれと訓誨、僅かの時間だったが十人ばかりだったが除隊する迄、時に振れた折に振れ感謝していた。実に愉快な雰囲気、和な娯遊世界、一生の思出、誠に有難かつた。との言を耳にした、一步誤れば軍法会議問題にもなりかねない、私も覚悟と勇氣が無いと出来る

云でない、然し無事規制二時間前に衛門に入った、すべて内秘、普通は映画観賞だが。滝ヶ原廠舎へは二年間に六回は行く、特に夏は前方に富士の霊峰、登山者が一列になつて一歩一歩踏みしめて征伏して居るのが目のあたり見える。声は聞えないが恐らく六根清静（眼耳鼻舌身意を清らかにして）と声高らかに唱へ乍ら、誠にすばらしい光景。

二ヶ年の内一回軍靴軽装で登山した、私は三回程登頂したので案外楽だつた。廠舎も聯隊も南京虫には閉口、初年兵は頻、手額は腫れ上り中には医務室で治療し練兵休の者もいる。室を毒薬で消毒する、然し寝台の隅等紙一枚位の隙間に居る奴は消毒しても効果はない。夜静になると奴さん出て来る、兵隊は昼の疲で何も知らない。朝起きると赤く腫れている。南京虫は聯隊がある限り絶滅出来ない、年に二三次聯隊の全寝台を入浴場の湯舟の熱湯に入れて殺す、湯舟は南京虫の死骸の山で大層なもの、一種異様な悪臭、十丈敷位の湯舟三個に四センチ位の南京虫のシュータン。

廠舎で同年兵が砲弾を拾つて来て土間でいたづらしていた処爆発して手額を失つた、いたづらは禁物。聯隊には軍旗祭と云うて軍旗を拝受した記念日である。この日は御馳走はあるし演習はなし、天下泰平、無礼講、然し勤務者は可愛想、軍旗には四六時中二人の兵隊が番兵として勤務。大正十三年十一月卅日陸軍々人服役令第六十条により帰隊除隊である、十日も二十日も前からあと何食で除隊、あと何回寝れば除隊だと全く子供がお正月を待つように数えたものだ。愈々待ちに待った卅日の朝が来た。除隊兵は十時整列の命令、服装は郷里より送つて来ない者には借用証を書けば隊で貸して呉れる、然し送り返すのが面倒なので

大部分私服で整列した。私一月より世田ヶ谷中学校四年第三学期を履修する関係上詰襟の学生服を新調し極楽寺の兄から送って貰った。他の者は羽織袴の礼服が多かつた。無論鶴巻へ帰つたので其の妹の保子さんが後妻となつて居られた。当時十七才、型の如く除隊祝宴を催し親戚近隣の人々が集つて盛大であつた。翌日近隣親戚を挨拶に廻り、除隊記念品として杯を進呈した。小田原寿昌寺へは十二月三日上山挨拶した。寿昌寺は倒壊風雨に洒され一品として使用に堪へるものは無かつた。

新紙幣の

新渡戸稻造博士

下川茂三郎

五十九年十一月一日発行の新紙幣五千円札に新渡戸稻造博士の肖像がお目見得することは、周知のとおりですが、新渡戸家は旧南部藩の名門で敵父は勘定奉行職にあり、母せき子さんは藩中評判の賢婦人であり、曾祖父伝蔵氏は兵学儒者の大家であり、祖父伝氏は南部領内の不毛地帯の原野

三本木の開墾を計画し、十和田湖より疏水してこの地を沃野と化すことに成功した人であり、その稻生川の水利によって約四十俵が取れた年の、文久二年（一八六二）八月三日新渡戸十次郎氏の三男として、岩手県盛岡市鷹匠小路に誕生し幼名を稻之助と命名さる。敵父は祖父伝来の開墾事

業を継承して著しき成績を挙げられ、又其の力を三本木市街地の建設にも努力されましたが、慶応三年先生が六才の時敵父は他界されその後は長兄七郎氏が事業を継ぎ、先生の幼小時代の勉学として寺小屋や藩公に係る共憤義塾で論語も学ぶほどの才気に富んだ才脳の持主で、明治四年祖父は七十九才の高齢を以て逝去されましたがその遺旨により、同年十才で敵父の実弟に当る、東京在任の叔父太田時敏の養子となり上京し名を稲造と改めました。

明治八年十四才の時東京英語学校に入学法律を志しまた他の専門を求める。

明治九年明治大帝陛下東北方御巡幸の御畏れ多くも三本木宿駅の新渡戸家を在在所に充てさせられ、祖父事業の疎水開墾に尽力せることを聞召され、其の功績を嘉し給ひ、異教の寵賜を辱うせしのみならず、孫々克く農事に励めよとの有難き御託に接し、挙家感泣した。茲に兄弟三名共に祖父の遺志を継ぎ、皇恩の優渥なるに報い奉らんと各自の志を立つることになったと言ふ。

明治十年六月東京英語学校から札幌農業官費開拓使生となり、十四年七月卒業し開拓使御用係申付られ准

判官に任じ、図書館所蔵書を誦読し母校の教鞭をしながら西洋文化も学び、十六年東京大学文科入学のため職を辞し、歐洲発達史、社会学、統計学更に英語に精通して米國留学を決意す。

養父は稲造の他日必ず大志を抱いて海外に雄飛する時あるを予想し、家禄を奉還して受けたる秩禄公債証書を生活費に使用せずして虎の子のように仕舞い置きたるものを、稲造君の旅費学費に充てしめ十七年九月一日愈々渡米の途に就きベリン市のアレゲニー大学・ポルチモア市のジョンズ・ホップキンス大学で経済学・農政・農業経済学・行政・国際法・歴史学・英文学等修得し、教室の手伝い講演の依頼で若干の謝礼を得ての苦学を続けて居りました。が、この時実に来米の福音とも云うべき音信に接す。

明治二十年三月札幌農学校・長代務より満三箇年同校助教に任じ農政学研究の爲め独逸國留学を命ずると云う辞令を受け、光明輝く将来の方針が確定した。

当時日本留學生の慈母と仰がれたモリス夫人宅で「あなたには是非会いたい」と云う人があるから紹介する」と言つて妙齡の淑女メリー・バッテリー・エルキン

トン嬢に引き合され、彼女は由緒あるフレンド派の家の門の出にして教養ある篤信の才媛でありました。

同年五月下旬紐育を出帆し愛蘭・蘇格蘭・英吉利・和蘭の諸國を経て六月下旬独逸のボンに着し、ボン大学で農政及農業経済を研究在学一年にして、ベルリン大学に転じ一年間留り農史学・統計学論文を提出して学位を得て、更に植民地政策研究に独逸東僻地並に米國及び加奈陀の各地を視察などする。

明治二十二年長兄七郎氏が逝去された為に実家を相続し新渡戸姓に復帰せらるかねてより文通交際をしていた先記のお嬢さんと、明治二十四年一月一日フィラデルフィヤに於て國際結婚した、夫人は実に稀れに見る行届いた良妻堅母で常に夫を見守り、後年先生が國際人として斯る成功を取めたのも夫人の内助の力に負う所少からず。

同年の二月無事帰國し三月札幌農業学校教授に任じ又北海道庁技師も兼務し望まれて私立北嶋中学校の校長に就任したり、遠友夜間中学校を創設して財団法人事業等、新渡戸夫妻の有益な活躍は益々煩雜をきわめ「武士道・農業本論」など著書したりした。

旧学位令改正に伴い三十二年三月東京帝大総長の推選に依り我國初めて農學博士の学位を授与せられたのち後藤伯の台湾總督府民政長官の要請によつて總督府嘱託員として歐洲視察をし、スペイン・ロンドン・パリ・ベルリン等調査しイタリヤ・ギリシヤ・エジプト等を経て帰國。總督府技師・殖産局長・兼糖務局長に任じ、農事試験場を設立して産業發展企画等博士一流の文化的精神を注入せられ、明治三十六年京都帝國大学法科教授となり總督府の嘱託も兼ね、三十九年京都帝大総長の推選により法学博士の学位を授与する。時の文相牧野伸顯伯に高等学校制度や教育方針を促進し第一高等學校長となり、東京帝國大学教授も兼任し、農科大学に於て植民地政策を講じたり在任八年に亘る。

当時日本は日露戦争の直後で國民思想の動搖期であり、博士独徳の人格主義と理想主義を掲げて、満天下の青年に帰向する所を示さる。「隨感録・帰雁の聲・ファウスト物語」等著書されました。

四十二年実業日本社の顧問となり毎号青年の爲の修養・世渡りの道・自警等を編纂されました。

四十四年八月我國最初の

日米交換教授として渡米しブラウン・コランビヤ・ジョンズ・バアジニア・イリノイ・ミネソタの六大学その他各地で前後百六十回の講演をなし、日本の事情を全米國に紹介し翌年紐育のブラウン大学より名誉学位を授けられました。

大正八年三月世界大戰後の状態と視察の爲め後藤伯に同伴し米國を経て歐洲に赴き、平和条約の調印と共に國際連盟が成立し、全權西園寺公・牧野伯・後藤伯の要請により事務次長として瑞西の寿府に七年間從事し「連盟事務局の良心」の人と呼ばれ、人格は年と共に益々円熟を増し智的協力國際委員會の設立立案者として活躍し終始渝らざる努力を払はれた。

大正十四年勅旨を以て帝國學士院會員仰付られ、又昭和元年貴族院議員に勅選せられ、昭和二年春國際連盟事務次長の大任を果して帰國、諸処よりの講演の依頼に依り、大阪毎日・東京日日新聞社の顧問ともなり國際連盟事業の國民理解と支持を喚起され好評を博し「東京西触れ、早稲田大學の講師として我國目下の非常時に際し如何なる理解と決心を持つべきか、内親外望など愛國の至情を洞察することが出来ます。

また東京女子大学初代の学長・東京女子經濟專門学校長にも就任されました。

第三回太平洋會議が昭和四年京都で開催された時井上準之助に代り議長として最も公平なる態度を以て統轄し成功裡に終らせた。

第四回太平洋會議は昭和六年上海に於て開催され日本代表委員長として死を決して國際的に活動せらる。

大正十三年に米國移民法が改正実施されし時、先生は非常に憤慨され、撤回されるまで米國の土は踏まなれと言つて居つたが、然るに滿州事変勃発以来米國に於ける日本の真意が曲解せられ反日感情が日増しに募り、國際の立場が頗る不利な位置に思ふかを見るを見て愛國の情禁ずる能はずと奮然と起ち、誤解一掃の爲め昭和七年四月渡米の途に就かれ一箇年に亘り百回を超ゆる講演を試みられた。

昭和八年八月加奈陀のパノンに開かれた第五回太平洋會議にも日本代表委員長として出席し、議事の進行に就き心を勞すること一方ならず、無事成功を以て會議を終りし時非常に疲労を感ぜられ、ウィクトリヤに令夫人を迎へ暫く休養の上更に紐育に赴き日本精神説明の運動に従事しようとして居られた所、九月十三日

急に激烈なる腹痛を覚え、同地のジュビリー病院に入院し、あらゆる治療と手厚き看護を尽したるも、十月十五日隔膜の腫物切除の手術後午後八時三十五分、七十二才を一期として永眠せられ、博士の功績天聴に達し勲一等瑞宝章に叙せられ侍従を差遣はされ幣帛並に祭葬料金一封を下賜あらせられた。

遺骨は十二月二日多摩墓地に、遺髪は三本木の祖父大素翁の眠る大素塚の側に分葬され、又加奈陀ヴィクトリア市スタンレー公園に市の有志者による、故新渡戸博士の記念碑が建設され博士は学識深遠なる碩学なりしのみならず生れ付き

の雄弁家であり、偉大なる国際人でありなお愛国者でありました。故郷の盛岡城跡に博士生誕百年期に記念碑建立し、碑文に「願はくはわれ太平洋の橋とならん」と該されている。

このような生涯の事蹟が現在の対米融和の証役に立てられ、古代聖徳太子の後札肖像がお目見得するを心待ち致しましょう。

参考文献

- 新渡戸稲造の手紙(英文)鳥居清治訳注著
新渡戸の学位 鳥居清治著
北海道大学図書刊行会
新渡戸稲造小伝 宮部金吾著

五千年の昔から現代まで

高田 掬泉

千葉市内加曾利にある加曾利貝塚は、五千年も昔の縄文人の遺跡と言う。五千年前という時代は、紀元三百年頃のものと言はれる小田原諏訪原古墳群にすら深い感動を覚える私達にとっては想像以外の大昔である。まだ狩猟採集生活をしていた縄文人の姿を正確に理解することはなかなか難しい。しかし加曾利貝塚博物館に展示されている縄文人の屈

葬姿のままの白骨を見る時は遙かに遠い々々私達祖先の姿を目のあたりにしたようで一種名状し難い感動を覚えるのである。そして同じ園内にある縄文人住居跡とこれをめぐる巨大な貝塚の断面を見学するとき、往時の人々の日常生活のさまざまなをさらがら目前にする思いがした。しかもこの遺址は、中国秦時代の兵馬俑発掘の遺跡と同じように

発掘現場をそのまま大きなドームで覆ってあり、その内部でこれを俯瞰的に見学出来るのがあるがたい。さて縄文期からずっと下った大和朝時代には、千葉のこのあたりはいはゆる東国と言はれた文化果つる地であった。そしてその頃編さんされた万葉集にはこの東国の人々の歌がたくさん収録されている。いはゆる東歌である。この日のバスに市川市を通過するとき、偶然に車窓から「真間町」と書かれた住居表示を見た私は、とっさに東歌にうたはれた有名な歌を思い出さずにはいられなかった。葛飾の真間の手古奈をまことかも吾に寄すとふ真間の手古奈を

万葉集三三八四

むかし真間に手古奈という美しい乙女がいた。彼女を愛する二人の若者は手古奈を挟んで互い争った。二人の男を同じように憎からげ想っていた手古奈は思い余って自らを淵に沈めて生命を絶った。この悲話は当時の人々に深いショックを与えた。この歌もホントにお前は真間の手古奈のように俺を想っているのかい、と問いかけている訳だ。

つづいて私達見学の一行は千葉県庁の傍の猪鼻城址に立った真新しい天守閣は

小田原城天守閣をそのまま模した博物館で、決して史蹟ではないことを中野先生は繰り返し解説した。小田原城以外に関東では天守閣が存在しないと信じている私達はこの解説をきいて安堵した次第である。猪鼻城は鎌倉以前からの城で、後代の城の石垣をめぐらした城郭ではない。しかし地内には土塁の跡らしい石垣がそこに見られ下総平野を見下すこの猪鼻城は阪東八平氏の中でも最も強大といはれた千葉常胤の権勢を示すには格好の地であったのだらう。千葉常胤は石橋山に旗上げして忽ちに敗れ去った源頼朝が、相模湾を横断して安房に逃れ着いた時、これを支援して瞬く間に十数万の兵を集めて鎌倉へ赴いたという。いはば鎌倉幕府にあっては因縁浅からぬ地である。

この猪鼻城を出ると、千葉の町空はいかにも海沿いの町らしく空の色がけた外れに明るい。そして海辺のあたりの赤と白のんだら模様様の煙突は、千葉製鉄か川崎製鉄の工場のものであらうか。やがてバスは日蓮上人ゆかりの中山法華経寺にとまったが、駐車場がどうして

せざるを得なかった。この寺には日蓮直筆の「立正安国論」が保存されていると言うが、外房小湊に生れた日蓮の一生は布教受難の連続であった。彼の説くところが余りに戦闘的であり、今の言葉で言う反体制イデオログの彼の論が、結局彼を悲運に陥れたといえる。しかし日蓮宗は各地に定着し、小田原でも寺院といえれば禅宗と日蓮宗が多い。法華経寺を見学出来なかつたバスは国府台の古戦場へ向った。国府台の地名が示すようにこの地は、古代国府即ち今で言えば県庁のような政府機関が置かれたところである。しかし私達がこの地を訪れたのは小田原北条勢が、この地元の里見勢即ち八犬伝で名高いあの里見の軍と争奪戦を演じた古戦場であるからだ。国府台の台地から東を望めば江戸川の悠々たる流れが眼下に眺められる。その流れの清澄なこと、河川敷の緑の美しいことに魅せられ決戦の往時を忘れてしばし涼風をむさぼった。中野先生の解説によれば北条軍は江戸川を渡河してこの台地の里見軍を敗り、氏綱氏康の二回にわたって両度とも大勝を得たと言う。まことに往時茫々去りゆくものは水の如しである。

国府台見学を終えた一行は、今度は大きく迂回して江戸川を渡り、対岸の松戸市は柴又の帝釈天に参詣する。そして有名な川基料亭を右に見て江戸川堤に上って川を見下ろした。少し下方に渡舟が一艘、竿をさして客を運んでいる。最近流行の歌謡曲で知られる矢切りの渡しである。対岸は広々とした田園地帯で、明治の歌人、伊藤左千夫の小説「野菊の墓」の悲恋のヒロイン民子の墓が今もあると言ふ。野菊の墓は今まで映画にテレビに何回となく上演されて馴染み深いドラマである。この劇の主人公達はこの水郷田園風景を背景に青春の淡い恋物語りを繰りひろげたのである。伊藤左千夫はこのあたりで牛を飼ひ、牛乳搾乳を業とした。牛飼が牛飼うときに世の中の新しい歌大いにおこる

この歌は明治の初期に短歌俳句の革新に挑戦した正岡子規に師事した左千夫の偽らざる抱負であったのだ。左千夫はのちに歌誌「アララギ」を興し、日本短歌史上に大きな足跡をのこした江戸川堤に別れを告げた一行は、バスの待つ帝釈天に再び戻った。